

三四番歌

I. 本文

(題知らず)

(よみ人しらず)

34 やび近く梅の花うゑじ

あぢきなくまつ人の香にあやまたれけり

II. 注釈

○やど

こゝは、家ではなく家の戸口(屋前)の意。

○梅の花

「恋人の薫香」と「梅の香」を「あやまつ」のであるから、「梅の木」ではなく「梅の花」と詠んだ。

○うゑじ

ワ下二「植う」+打消意志「じ」。梅の木を植えまじ。

○あぢきなく

『古今集』中の「あじきなし」は、当該歌以外に仮名序(十二頁四行)、一四三、四五五の三例。する意味がなくむなしの気持ちになる意で用いられる。直下の「待つ」ではなく、「あやまたれけり」を修飾する。

○まつ人の香

詠者である女の所に通つて来ている男の衣にたきしめてある香の匂い。

○あやまたれけり

自発「る」+詠嘆「けり」。自然に間違つてしまつてゐるよ。

III. 現代語訳

家の戸口近くには梅の花など植えるまい。むなしの気持ちになつてしまふ、待つているあの人の香と間違つてしまつから。

IV. 余録

「梅」と「やど」を詠みこんだ歌は『万葉集』に十一首あり、平安期にも二百首以上を数えるなど、取り合わせとしては、さほど珍しいものではない。『万葉集』では、資料1に示したように、「我がやど」と「梅」の取り合わせが目立ち、詠者自身の家(の周辺)の「梅」を題材とする歌が多い。また宴の歌が多く「梅」を觀賞しつつ詠んでいると見られる。ところが、平安期にはいると様相が変わつてくる。三代集にその例を求めてみると、資料2のように、『古今集』中に三首、『後撰集』に一首、『拾遺集』四首ある。読み人知らず歌が五首と半数以上を占めている点、詞書から詠歌事情の判明する歌が全て屏風歌である点が注目される。屏風歌は、屏風絵の上方などに設けられた色紙形に書かれた歌のことであり、『古今集』の編纂を命じた醍醐天皇の父、宇多天皇の頃から増加したと考えられている。屏風歌の場合は、屏風の絵が歌に大きな影響を与え、画中の人物として歌を詠ずる場合もある。その屏風歌を詠む歌人として評価が高かったのが、『古今集』の撰者、紀貫之である。『貫之集』にも資料3のような「梅」と「やど」を詠みこんだ歌が六首あり、その他にも、詞書から、家の庭に梅の木があり、咲き誇っている様子が屏風に描かれていたことがうかがえる例がある(資料4)。平安期には、実景としての庭の梅ではなく、屏風歌に見られるような観念上の庭の梅を詠むよう傾向が強くなつた。

では、当該歌も、このような屏風歌や題詠を念頭に置いて解すべきであるか。実は、当該歌は、『猿丸大夫集』*1に次の詞書と共に載る。

前近き梅の花咲きたりけるを見て

宿近く梅の花植ゑしあぢきなく待つ人の香に誤たれけり(三二)

『猿丸大夫集』は、『万葉集』の歌と『古今集』の読み人知らず歌で構成されている歌集である。当該歌の場合も、猿丸大夫の歌が、読み人知らず歌として『古今集』に採られたというよりも、猿丸大夫の歌とも伝承される古歌が採られたとみてよいだろう。『猿丸大夫集』の詞書によれば、当該歌は実景の梅を見て詠出したことになる。そうであるならば、『古今集』以降の平安期の歌風よりも、『万葉集』の歌風に近い。『猿丸大夫集』に存することを考慮すれば、当該歌は、読み人知らず歌の時代の歌、すなわち、『万葉集』から『古今集』への途上にある歌として相応しいものであろう。

〈資料1〉『万葉集』の「梅」と「やど」*2

(藤原朝臣久須麻呂の来報ふる歌一首)

春雨を待つとしあらし我がやどの若木の梅もいまた含めり(④七九)

(梅花の歌三十一首)

春さればまつ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ(⑤八八)

うちなびく春の柳と我がやどの梅の花とをいかに別かむ(⑤八二)

我がやどの梅の下枝に遊びつつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ(⑤八四)

冬十二月十一日に、歌蒐所の諸の王・臣子等、葛井連広成の家に集

ひて宴する歌二首

我がやどの梅咲きたりと告げ遣らば来と言ふに似たり散りぬともよし(⑥一〇二)

中納言阿倍広庭卿の歌一首

去年の春い掘して植ゑし我がやどの若木の梅は花咲きにけり(⑧一四三)

巨勢朝臣宿奈麻呂の雪の歌一首

我がやどの冬木の上以降る雪を梅の花かとうち見つるかも(⑧一六四五)

大伴宿禰家持が雪梅の歌一首

今日降りし雪に競ひて我がやどの冬木の梅は花咲きにけり(⑧一六四九)

(柳を詠む)

梅の花取り持ちて見れば我がやどの柳の眉し思ほゆるかも(⑩一八五三)

花に寄する

我がやどに咲きたる梅を月夜良み夕々見せむ君をこそ待て(⑩三四九)

二月、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にして宴する歌十五首

恨めしく君はもあるかやどの梅の散り過ぐるまで見しめずありける(⑩四四九六)

〈資料2〉三代集「おほくちの梅」と「やど」*3

『古今集』(当該歌以外に二首)

色よりも香こそあはれとおもほゆれたが袖ふれしやどの梅ぞも(三三)

(題知らず)

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風によみてかきける(三五)

春くればやどにまつさく梅の花きみが千歳のかざしとぞ見る(三五)

『後撰集』(二首)

きて見べき人もあらじなわがやどの梅のはつ花をりつくしてむ(三三)

(題知らず)

わがやどの梅のはつ花ひるは雪よるは月とも見えまがふかな(二六)

『拾遺集』(四首)

わがやどの梅にならひてみよしの山の雪をも花とこそ見れ(九)

題知らず

冷泉院御屏風のゑに、梅の花ある家にまらうときたる所、平兼盛

わがやどの梅のたちえや見えつらん思ひの外に君がきませる(一五)

題しらす

いにし年ねじてうゑしわがやどのわか木の梅は花さきにけり(二〇〇八)

清和の七のみこ六十賀の屏風に

かぞふれとおほつかなきをわがやどの梅こそ春のかずをしるらめ(一〇二二)

〈資料3〉御所本「貫之集」の「梅」と「やど」*4

(延長三年左大臣殿北方御賀屏風歌)

むめのはなはおほかるやとこづくひすやふゆこもりしてはるをまつらむ(三三四)

延喜十六年齋院屏風のわかうち仰にて

人のいゑの女ともにはのまへにいて、むめのはなみあるはのこれる(三三四)

ゆきをみる

むめのはなささくとしらすやみよしのやまにともまつ雪のみゆらむ(六五)

おなし四年正月右大将殿の御屏風の哥

庭におりたちてむめのはなをみる

はるたゝはさかんとおもひしむめのはなめつらしひにやひとのおるらむ(四六五)

三五番歌

I. 本文

(題知らず)

(よみ人しらず)

35 梅の花立ちよるばかりありしより

人のとがむる香にぞしみぬる

II. 注釈

○立ちよるばかり

「ばかり」は、中古以後に用いられた限定の意を表わす副詞。ほんの…だけの意。こゝは、ほんの少し立ち寄る程度の意。

時間的起点を示す格助詞。：時からの意。

○人のとがむる香

「人」は、詠者の男と恋愛関係にある女。その女が、他の女の移り香かと嫉妬して不審に思う句い。マ四自動詞「しむ」(香がしみつく) 十元了「ぬ」連体形。染みついてしまったの意。

○しみぬる

III. 現代語訳

梅の花のもとをほんの少し立ち寄る程度にいた時から、あの人が不審に思うほどの(梅の)香が染みついてしまった。

IV. 余釈

当該歌は、梅の花のすばらしさに立ち寄っただけであったのに、恋人に詮索されるほどの移り香であったといつて、梅の花の香りを賞美する歌と解釈できる。その背景には、女性の嫉妬という恋愛の要素があるが、あくまで梅の香りのすばらしさに重点がある。ところが、当該歌は、『兼輔集』*5には、次のようにある。

いとしのびたるうつり香の人しるばかりにありければ、そのをんなに

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむるかにぞしみぬる (四〇)

『兼輔集』の詞書によれば、兼輔が密かに関係を持った女性の移り香が、他の人から指摘されるほどであったので、秘密の恋人に贈った歌ということになる。そうであれば、この歌の「梅の花」とは、植物ではなく、兼輔の秘密の恋人ということになる。よつて、はかない逢瀬であったのに、人がとがめるほどの、あなたの移り香がしみついてしまったよという、恋の歌になってしまふ。藤原兼輔(八七七〜九三三)は、京極中納言、堀中納言とも呼ばれる。紀貫之の庇護者として知られており、三十六歌仙の一人でもあるなど歌人としても名高い。『古今集』にも四首が入集している(三九・四一・四二・七四九・二〇一四)。それを踏まえれば、当該歌が、兼輔の歌を何らかの理由で、読み人知らずとしたものとは考えがたい(貫之との関係で言えは、むしろ積極的に名前を記しそうなもの)。

その点について、片桐洋一*6は次のように指摘する。

『古今集』のよみ人知らず歌を、兼輔がそのままに現実の恋愛の場を利用したと考えるのである。たとえば『源氏物語』の空静の巻で空静が『伊勢集』に見える「うつせみの羽におく露のこがくれてしのびしのびに濡るる袖かな」という歌をそのままに用いたのと同じだと考えるわけである。こゝで考えれば、『古今集』の「よみ人知らず」という表記も生き、『兼輔集』の詞書もそのままに生きているのである。『古今集』では、まさしく自然に対して詠んだ歌であったが、『兼輔集』では人事になった歌になっているのが大きな相違である。『古今集』ではあくまで梅が香を賞美する歌であり、にもかかわらず「人のとがむる」と言ったことに王朝的風流の世界が髣髴されるのだが、『兼輔集』では具体的日常的になり過ぎている。よみ人知らず歌を日常的の世界に応用したところに兼輔の風流を感得すればよいと思ふのである。

『源氏物語』の例が、その証拠となるかどうかは、議論のあるところだ

ある*7が、兼輔が当該歌を恋歌として利用したと見る点は首肯できる。恋の部ではなく、春の部に配列されている点から考えれば、少なくとも『古今集』の撰者は(貫之は)、当該歌を恋の歌ではなく、梅の香りを讚美する歌として入集させている。『兼輔集』の例は、当該歌の享受の一端と受けとめて置くのが穏当であろう。撰者の意図に従って、当該歌は、梅の花の香りを賞美する歌と解しておきたい。

なお、梅の香を人の「とがむる香」とする歌は少ない。

V. 配列

題知らず

よみ人知らず

折りつれば袖こそはへ 梅の花ありやと こゝに鶯の鳴く (三三)

色よりも香こそはれとおもほゆれ たが袖ふれしやどの梅でも (三三)

やど近く梅の花うるじ あちきなくまつ人の香にあやまたれけり (三四)

梅の花立ちよるばかりありしより 人のとがむる香にぞしみぬる (三五)

むめの花ををりてよめる 東三条の左のおほいまうちぎみ

鶯の笠にぬふてふ梅の花 折りてかざさむ 老かくるやと (三六)

三三番歌からはじまる梅歌群の冒頭四首は、ともに題知らず、読み人知らずとして梅の香を詠む歌である。三三番歌から三三番歌へは「袖」が、三三番歌から三四番歌へは「やど」が、三四番歌から三五番歌へは「人の香」(薰香)が共通しており、連続性を支えている。

三三番歌では、香りが梅から袖へ、三三番歌では、袖から梅へと移っており、ある種の対応が見出せる。一方、三四番歌、三五番歌は、ともに恋の感情を詠み込みつつ、梅の香を讚美しているが、三四番歌は、梅の香を恋しい男の薫香を誤る女の歌、三五番歌は、梅の移り香を女、の移り香と疑われる男の歌である。こちらも、男と女の対応が見出せる。四首に連関性をもたせつつ、二首ごとに対応させており、大変に考えられた配列と言えるだろう。

ただし、この連続性はこゝで途切れる。次の三六番歌からは、梅を折る歌が続き、嗅覚から視覚へと転じて行く。

【注記】

- *1 『猿丸大夫集』本文は、鈴木宏子「校注」『和歌文学大系 猿丸集』(明治書院、一九九八年)によった。
- *2 『万葉集』本文は、佐竹昭広ほか『萬葉集歌文篇』(塙書房、一九七二年初版、二〇〇二年初版二十一刷)によった。
- *3 『古今集』本文はテキストに、『後撰集』と、『拾遺集』は、『新編 国歌大観』によった。
- *4 御所本『貫之集』本文は、新藤協三「翻刻」『御所本貫之集』付初句索引 一三六人家集叢稿(二) 一(「調査研究報告」18、国文学研究資料館文献資料部、一九九七年)によった。
- *5 『兼輔集』本文は、平田喜信「ほか」『合本 三十六人集』(三弥井書店、二〇〇三年)によった。
- *6 『古今和歌集全評釈(上)』講談社、一九九八年、四五八頁。片桐が指摘する『源氏物語』の歌であるが、『伊勢集』の全ての系統に存在するわけではない。『伊勢集』の歌が、『源氏物語』に用いられたのではなく、『源氏物語』の歌が『伊勢集』に取り入れられた可能性も指摘されている。